

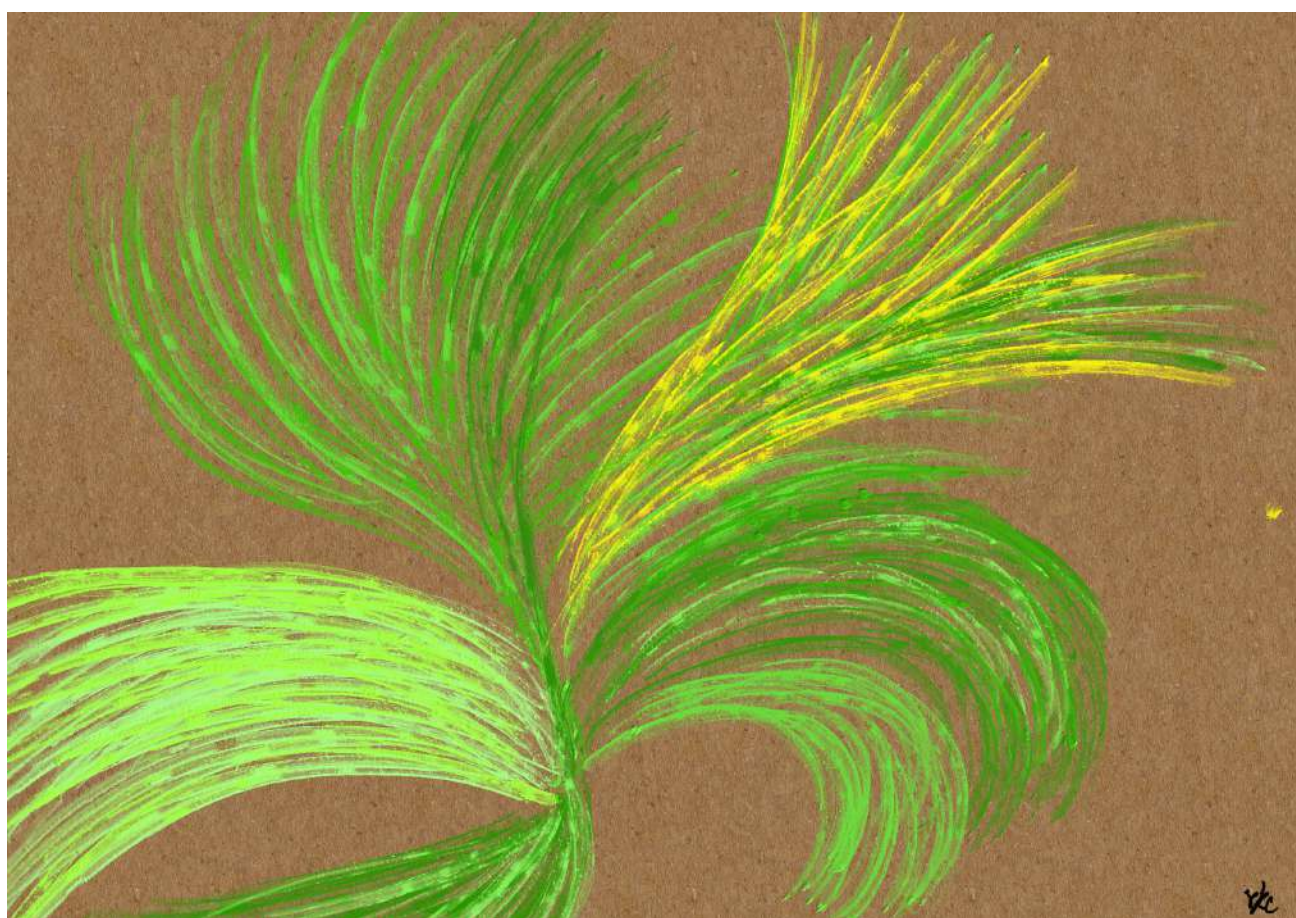
---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 309

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



No.1270 奥深き緑の魅力\_Attractiveness of Deep Green

---

## 目次

- 6161. 今朝方の夢
- 6162. 今朝方の夢の続き
- 6163. 「経済成長」という言葉の虚偽性
- 6164. 経済・企業社会の道徳的・倫理的発達段階/効率性追求と脆弱性の拡大
- 6165. 物理的な書物や論文がもたらしてくれる恩恵
- 6166. 今朝方の夢/無限の詩と一編の小説
- 6167. オランダのオルタナティブバンクのトリオドス銀行について
- 6168. 社会に蔓延する音響兵器
- 6169. 暴力的な声・治癒と変容をもたらす声/無自性と悟り/数字の「3」
- 6170. 日本へのフライトに関して
- 6171. 季節の変化への適応の落ち着き/トリオドス銀行について
- 6172. 今日の雑多な考え事
- 6173. 「一次元的世界」に対する偉大な拒絶
- 6174. 「マクドナルド化」と非人間化/今朝方の夢
- 6175. アマルティア・センの書籍を読んで/書籍の一括注文の追加
- 6176. 今週末の予定と今日の読書
- 6177. 今朝方の夢
- 6178. 種々の余裕と慈悲心/経済合理性に侵された教育
- 6179. 消費煽動型のマーケティングと空虚な自己について
- 6180. 9月を迎えて

時刻は午前6時半を迎えた。今、闇が消え、ほのかなピンク色を付けた空が広がり始めた。

本日の読書は、“Doughnut Economics: Seven Ways to Think Like a 21st-Century Economist”から始めようかと思う。こちらは一般書であるから読みやすそうであり、注記を除けば300ページ弱なので、比較的早く初読が終わるように思う。本書を読み終えたら、明日の前野隆司先生との対談に向けて、献本していただいた8冊の書籍を全てもう一度再読したいと思う。特に自分が下線を引いた箇所や書き込みをしたところ中心に読み返しておきたい。そうすれば、明日の先生との対談はさらに実りあるものになるだろう。その場でどのような対話がなされ、どのようなものが創発されるのかを含め、先生との対談が今から楽しみだ。

今朝方はいくつか印象に残る夢を見ていた。それらについて書き留め、明恵上人のように、夢とシンクロした日々を生きていこう。夢の中で私は、ある日本の学者の方と一緒に砂浜の上を歩いていた。その学者の方がふと、「実はこの辺りの海の一部を所有してるんだよね」と私に述べた。海の一部を所有しているというのがどういう意味なのか尋ねたところ、文字通り、海の一部の区画の土地を所有しているようだった。その土地には希少な植物が生息しているらしく、その学者の方は誇らしげにそのことを教えてくれた。

気がつけばちょうど私の手にその植物があり、見ると色は白であり、形はサボテンのようだった。少しチクチクしそうな植物だが、どこか美しさと可愛らしさがあった。その学者の方は、その植物には希少性があり、市場で高価で取引されていることについても教えてくれた。私は具体的にどこからどこまでがその人の持ち物としての土地なのか知りたく、それを尋ねたところ、その学者の方はよく覚えていないと笑いながら述べた。

土地の所有を証明する権利証が近くの市役所に保管されているようなので、私たちはそこに向かった。すると、その学者の方はどこかに消え、その代わりに、大学時代のサークルの先輩がそこにいた。なぜかその土地は、先ほどの学者の方ではなく、その先輩の祖父が所有しているようであり、先輩の祖父がかつて登録手続きをこの役所で行っているようだった。先輩は祖父が提出した登録書を探し始めたが、一向にそれが見つからなかった。先輩が市役所に残された過去のノートから祖父

---

の筆記を探そうとしていると、その様子は全てモニターに映されていて、私はモニターを見ながら、固唾を飲んで見守っていた。ふと職員たちが働いているデスク周辺を見ると、そこにもっと古い年代のノートがあることに気づいた。先輩の祖父は、おそらくそちらの古いノートに記述を残したのではないかと思ったので、先輩にその旨を伝えた。先輩はすぐにそちらの古いノートを確認したところ、先輩の祖父の直筆のサインを見つけた。私は少しホッとした。

すると、私の横に大学時代の同じサークルの友人がいた。友人は、その市役所でたった今、あるノートの一片の切れ端を見つけ、それを見て驚いたと言う。何やら、「XX(友人のニックネーム)に伝えたフランス留学の嘘の話」という書き込みがなされているのを見つけたらしいのだ。私は思わず笑ってしまった。そう言えば、大学に入りたての頃の新歓期に、その先輩とすぐに打ち解け、私はその先輩とグルになって、ちょっと友人をからかう意味を含めて、先輩と口を合わせて、先輩がフランスに留学したという話をでっち上げたのを思い出した。

私はまさか友人がいまだにその話を信じているとは思っておらず、逆にこちらがびっくりしてしまった。その先輩がフランスに留学したのは嘘だよと伝えると、私の目の前にパリ市内の大きな広場が広がった。そして、そこを歩くフランス人たちの姿が知覚され、その後、私はパリにあるフランスの名門大学であるソルボンヌ大学のキャンパス内にいて、荘厳な建物の中に入っていこうとしていた。すると再び私の意識は市役所にあつて、そこで友人に別れの挨拶をした。先輩も奥さんと一緒に過ごすために早く帰りたい様子であり、ちょうど奥さんから電話がかかって来て、仲睦まじく電話でやり取りをしていた。そこには奥さんのことを思う先輩の優しさが滲み出ている。フローニンゲン:2020/8/27(木)06:55

### 6162. 今朝方の夢の続き

時刻は7時を迎えようとしている。今、小鳥たちの鳴き声が聞こえて来て、1日の始まりを祝福しているかのようだ。天気予報では今日は曇りとのことだったが、今は雲がほとんどなく、朝の柔らかい世界が目の前に広がっている。

先ほど今朝方の夢について書き留めていたが、今朝方はその他にも夢を見ていた。夢の中で私は、おそらく日本のどこか田舎の街の海で釣りをしていた。そこは高く大きな防波堤があり、私は

---

防波堤の上から釣り竿を垂らしていた。その場にいたのは私1人だったが、少し離れたところに大学時代のサークルの友人がいて、彼も釣り竿を垂らしていた。しばらくして、後ろから突然、サークルの先輩が現れた。その先輩はサークルのキャプテンを務めていた方である。

先輩は笑顔で私たちに話しかけ、先輩も釣りに来たと言う。すると、先輩の背後から物凄い勢いで走ってくる女性がいた。そしてその女性は私たちの横を勢いよく通りすぎ、先輩が「あっ！」と述べた時には、もうその女性は防波堤のてっぺんから海に向かって飛び降りていた。その防波堤の高さは数十メートルほどあり、また防波堤の下の海には大きな岩などが転がっていて、防波堤から飛び降りるというのは自殺行為に等しかった。

先輩が「あっ！」と述べたのは、どうやら先輩はその女性のことを知っているようだったからである。勢いよく飛び降りた女性がどうなったかは、私はもう見なくても想像できたので、怖くなって防波堤の下を見ることをしなかった。代わりに先輩が様子を見たところ、その女性は即死のようだった。そこで先輩はすぐに警察に通報した。友人と私はもうそこで釣りをするのをやめにしようかと思ったが、警察がやって来て、死体を処理してくれたらまた釣りができるかもしれないと思った。私は死んだ女性についてあれこれ考えるのをやめにして、早く警察がやって来てくれないかと祈った。そこで夢の場面が変わった。

その次の夢の場面としてあったのが、1つ前の日記で書き留めていた場面であった。そして、そこからまた別の夢を見ていたことを思い出した。次の夢の場面では、私はサッカー日本代表の期待の若手選手と一緒に、小さなボルダリングジムにいた。そこはジムというよりも、誰かの家の中のような感じであった。

マンションの一つの部屋の中にボルダリングの壁があるような感じであった。そこで私たちはボルダリングを楽しんでいた。その選手は運動神経が良いだけでなく、知性が極めて高いので、ボルダリングの課題に対しても、高度な知性を発揮して向き合っているようだった。彼が早速昨日できなかったとても難しい課題に挑戦すると述べた。彼は真剣な表情を浮かべ、深い呼吸をした後に壁に向かって走り始めた。すると、壁の上をまるで忍者のように走り抜けて、見事にゴール地点まですぐさま辿り着いた。それを見て私は思わず拍手をした。昨日できなかった課題を一発で攻略した彼も

---

また笑顔を浮かべており、拍手を送る私に対してお辞儀をした。その様子を見ていた見知らぬ若い男性が、今度はその課題と同じぐらいの難易度の課題に挑戦し始めた。

するとその男性も見事に課題を一発でクリアした。その男性が取り組んだ課題の一番難しい点は、最後ゴール地点に向かう時に、手をかけられる場所がなく、足だけをかけられる場所から横っ飛びしてゴール地点を掴む必要があったことである。しかも、そのゴール地点をしっかりとホールドすることがまた難しく、強い握力が必要であった。一方で、日本代表の若手選手が取り組んだ課題の難しさは、壁の上を忍者のように走り抜ける特殊な技術が要求されていることであった。ふと気づくと、私は高校時代の友人(HH)の家にて、彼の家の浴室にいた。

浴室にある洗濯機の横に、ボルダリングの細長い壁があり、そこにゴムでできた課題が設置されていた。どうやらそれを握ることによって、ボルダリングに必要な握力を鍛えることができるらしかった。ちょうど友人が浴室にやってきて、その使い方を教えてくれた。

次の夢の場面では、私は見慣れない建物の中にいた。いくつかの部屋があるフロアにいて、フロアの共有スペースの休憩所のようなところに私はいた。そこで偶然にも、大学時代のゼミの友人(TM)と小中学校時代の友人(MS)がいた。ゼミの友人は大学時代に軽音楽部に所属しており、その場でギターの演奏を始めてくれた。また、小中学校時代の友人は野球部に所属していたのだが、どういわけか突然歌を歌い始めた。

2人の友人のギターと歌声はなかなか心地良く、しばらくそれを聞いていたいと思った。すると、どこからともなく、父方の祖母の声が聞こえてきた。祖母は優しく、もう寝る時間なので静かにしてほしいということを伝えてきた。そのため、私たちは音楽の演奏をそこでやめにした。確かに、時刻は午後の10時に近づこうとしており、音楽をするには遅い時間だった。

そこからまた休憩スペースのテーブルに腰掛けて3人で話をしていると、中学校1年生の時の担任の先生が突然やってきた。私たちは学校にいるわけではなかったのだが、先生は、学校に持って来てはならないものを私たちが持って来ていると述べ、それをすぐに差し出せと述べた。それはタバコのようなものであり、意識の変容を促す物質が含まれているものだった。私たちは、素直にそれ

---

を先生に差し出したが、なぜか私たちは全員監獄に送られることになった。だが私はそれに対して抵抗することなく、すぐに自分の無罪を証明できると思った。

最後の夢の場面としては、高校時代のある女性友達と話をしていたのを覚えている。彼女がカバンに何かお守りのようなものをつけていたので、それについて尋ねた。すると、入学してすぐの頃に、登校中に何人かの男子生徒に声をかけられ、彼らとその友人に思いを伝える手紙を渡したそうなのだ。手紙と言っても立派なものではなく、メモ帳の裏に書かれたものだったそうだが、それでも彼らの思いが込められていることに変わりはないと私は感じた。彼女は、その手紙を大切に持っていて、それを折り畳み、プラスチックのお守りケースのようなものに入れてカバンにつけているらしかった。彼女はそのエピソードを恥じらいの笑みを浮かべながらも嬉しそうに私に話してくれた。フローニンゲン:2020/8/27(木)07:31

### 6163. 「経済成長」という言葉の虚偽性

時刻は午後3時半を迎えようとしている。今日は季節の変わり目を象徴するように、早朝に鼻水が出ていた。今も時折鼻水が出ており、喉も少しイガイガする。身体が新たな季節への適応をしていることを感じる。

今日はここまでのところ、読みかけの経済学書1冊と新たに1冊を読み終えた。どちらの書籍からも得るものが多く、引き続き現代の経済学的思想と枠組みの歪みについて探究をしていこう。いくつか雑多なことを考えていたので、備忘録がてら忘れずに書き留めておく。

「経済成長」という言葉の畏として、それを追い求めれば追い求めるほど、逆に経済が蝕まれていき、社会が蝕まれているのだから、「経済成長」という言葉が指す類の成長を希求することから降りるだけでなく、そもそもそうした言葉を使うことを止めるのを迫られているように思う。その代わりに、「幸福状態の拡大・持続」に類するような言葉が誕生し、そこに向かって経済活動が進んでいく必要があるのではないかと常々感じる。

2000年にパリの大学に所属する経済学部の大学生たちが、経済成長を前提とした旧態依然とした経済理論を大学で教わることに反抗し、教授人に抗議の手紙を送った出来事や、そこからしばらくして、ハーバードの学生たちが、経済成長を所与とした既存の経済理論を依然として教えている教

---

授の授業を集団でボイコットした出来事が示唆するように、若い世代には、既存の経済学のおかしさについて直感的に何か感じていることがあるのではないかと思える。

そのようなことを考えながら、「人間的生態経済学(humanistic ecological economics)」のような経済学が台頭することについて思いを馳せていた。それは自分の造語であるが、そうした経済学を構成するであろう諸分野を学んでいこう。人類と自然、及び地球の幸福に資する経済学の実現に向けて、小さなところから探究と実践を続けていく。

アマルティア・センは、発達(開発)の主眼は、経済成長ではなく、人々の生活をより豊かにしていくことに当てるべきだと明確に述べている。仮に経済成長を取り上げるのであれば、それをGDPだけをもって捉えるというのは、明らかに観点不足だろう。仮に経済成長を議論するのであれば、より多面的な観点でそれを捉えていく必要がある。GDPというのは1つの尺度に過ぎず、それだけをもって経済成長を議論するのはひどく限定的である。

そうした観点において、ニュースなどの中で、「経済成長を表すGDP」という形で紹介するのはどこか間違っているのではないかと思う。それは人々に誤解を生むだけでなく、経済成長というものがGDPの単なる拡大だと思い込ませてしまうことにもつながる。もし述べるのであれば、「経済成長の1つの側面であるGDP」と紹介する方がより適切だろう。そしてそれよりも重要なことは、経済成長という言葉聞いて、それが実現されていけば喜び、それが実現されていなければ心配するという社会的なコンディショニング(あるいは社会的なプログラミング)から脱却することではないかと思う。

GDPの単純な増大を意味する経済成長と人々の幸福が結びついていないことは実証研究においても明らかであり、経済成長が社会や地球を蝕んでいるというデータも既に存在しているはずであるから、「経済成長が実現されている」というニュースを聞いて、むしろ人々が心配がるぐらいの状態になっていく必要があるのではないかと思う——それもまた逆向きのコンディショニングであるが——。

兎にも角にも、GDPだけで測定できるような経済成長を盲信的に希求するのは相当に馬鹿げたことであり、そこで語られている経済成長なるものが、他の領域にどのような影響を与えているのかについて少なくとも考えを巡らせるような思考力を持つ人々が増えないと、人類・社会・地球という生態系



---

は本当に危うい状態に陥ってしまうように思えてならない。実際のところは、その序章はすでに終わり、次の深刻な事態に進んでいるのではないかと思う。フローニンゲン:2020/8/27(木)15:40

#### 6164. 経済・企業社会の道徳的・倫理的発達段階/効率性追求と脆弱性の拡大

時刻は午後3時半を迎えた。もう少し日記を書き、ここから少しばかり作曲実践を行おう。創作活動と読書、そして日記の執筆が調和の取れた形で相互作用的に行われている。

経済学者かつ倫理学者のジョージ・ディマーティノは、経済学は医学よりも200年ほど倫理の観点で遅れていると指摘している。その指摘を見て、過去にはアダム・スミスや現在においてはアマルティア・センのように、道徳や倫理と経済学を絡めて探究している経済学者がいることは確かだが、その絶対数は限りなく少ないことに考えを巡らせていた。

そもそも、現代医学ですら、その倫理観の発達度合いはいかほどかと考えてしまうぐらいなのだから、それよりも200年前の倫理的成熟度しかない現代の経済学はどのようなものなのかとってしまう。ビジネスと経済が密接に結びついていることからすれば、企業倫理の発達度合いがどれほどかも容易に想像できてしまうし、それは想像できるだけではなくて、実際に企業社会から受け取るモノやサービスを見て、具体的な企業行動を見ていれば肌感覚を通じてその発達の程度がわかるはずである。

より成熟した倫理観や道徳観を経済・企業社会に導入する際に、はたまた彼らの活動の根底にある論理を変容させていくときに、彼らの論理をいきなり全て変えようとするのは往々にして失敗に終わるとある経済学者が指摘していたのを思い出す。企業社会の既存の論理をいきなり剥ぎ取るようなアプローチではなく、彼らの論理を包摂しながらにしてより治癒的・変容的な論理を構築していくこと。それがより実効的かつ賢明なアプローチだろうか。

システムの効率性を上げることに躍起になると、逆にシステムは脆弱なものになるというシステム科学の教え。2008年の金融危機においては、金融システムを極度に効率化させようとしたことがシステムの脆弱性を高め、結局金融システムは崩壊した。血液という体内システムも単にオメガ3の脂肪酸を摂取して血液をサラサラにすればいいというのではなく、必ずオメガ6の脂肪酸がもたらす凝固性も必要である。現在の金融システムは、依然として効率性を上げることに躍起になっており、それ

---

を身体の血液システムに喩えれば、血液の流動性を高めることだけに躍起になっているような状態であり、血液には固まる力も必要であることを忘れてしまうと、それは血液システムの崩壊のみならず、身体が外傷を負ったときに血液に凝固する力がなければ、身体全体の機能停止も招いてしまいかねない。

SNSの使用やインターネットの過剰利用は、ヴェブレンが提唱した「顕示的消費」を絶えず刺激し、人々をさらなる顕示的消費に駆り立てているように思える。端的には、それらは人間の低次元の欲望を刺激し続けているのだ。SNSやインターネットの中毒者は、自らが絶えず低次元の欲望を刺激されている可能性について自覚的になる必要があるように思えるが、そもそもそうしたツールを使っている者にそうした内省力があるとは思えないという悩ましい問題がある。

内省能力の観点において、現代人は依然として少年・少女的な発達段階にあり、それを許容している社会もまた少年・少女的な発達しか実現されていないのだろう。フローニンゲン:2020/8/27(木)  
15:55

#### 6165. 物理的な書物や論文がもたらしてくれる恩恵

時刻は午後7時半を迎えた。今空には少し雲があって、今日は夕日を拝むことができない。

昨日和書を8冊ほど注文し、今週末にはもう10冊ほど欧州のアマゾンから購入しようと思っているので、結局今月は70冊ほど新しい書籍を購入したことになる。書籍が溜まっていく一方だが、理由があって物理的な書籍を必ず購入するようにしている。とりわけ日本のアマゾンから和書を購入する際には、送料を考えて、いつも日本で受け取るようにしているため、そうであれば電子書籍で読んでもいいかと思うこともあったが、書籍は物理的に所有することが自分にとってはとても望ましい。

例えば、背表紙や表紙を眺め、無数の書籍の背表紙や表紙から絵画的な知的ゲシュタルトが自分の中に出来上がっていく感覚があるのだ。また、本に囲まれて書斎の中で過ごしていると、無数の物理的な書籍から知的エネルギーを受けているような感覚がある。そして、分野がごた混ぜのランダムな書籍の背表紙や表紙から、調和の取れた1つの高次元の知識構造がふと浮かび上がってくるような感覚になることもある。こうした現象は、電子書籍だとなかなか起きない。それはほぼ不可能なのではないかと思ってしまう。

---

イメージとしては、知的ゲシュタルトを1枚の絵画作品に喩えると、電子書籍を通じて書物を読むのは、絵画の一部を切り取られた形で見せられるような感覚である。そう考えると、やはり高次元の知的ゲシュタルトを作るという目的において電子書籍は不向きのように思える。

物理的な書物を所有していくことは引っ越しの際は少し大変だが、今後も継続して物理的な書物と皮膚感覚を伴った形で向き合っていく。学術機関で研究をしている時、やはり物理的に本を所蔵していない学者は皆無であったし、仮に電子的に書籍や論文を読む場合には、それらの文献はさほど重要でないものに限られていたように思う。時々、電子データとして論文を読むことがあるが、それはやはりさっと情報を取り入れたいものだけに限っている。繰り返し読むに値する知識や叡智が内包されている論文は、今でも必ず印刷するようにしている。研究者として、物理的な書物と論文に囲まれる形で知的エネルギーを得て、物理的な書物や論文を眺めることを通じて、新たな知的ゲシュタルトを生み出していく姿勢は絶えず持っておきたい。

今後はやはりシベリウスの家にあったような図書室が必要だろうか。そうした図書室に書物や論文を所蔵し、それらに囲まれる生活を夢想する。物理的な文献たちは、どこか自分を見守ってくれているかのようなのだ。物理的に文献がそばにあると、ふとした時にそれらを手に取り、そこから思わぬ気づきや発見が得られることがある。

ある文献と別の文献をその場で組み合わせる形で理解を深めたり、ある文献から別の文献へと自発的に移っていくような現象も起こる。そのような偶発事象によって、自分の知的体系が少しずつ豊かなものになっている感覚がある。今も書斎の机、本棚、ソファ、椅子の上にはたくさんの文献があり、それらを眺めると、新たなアイデアや感覚がどんどんと生まれてくる。こうした環境にいられることの有り難さを思い、今後も継続してこの環境を育んでいこう。フローニンゲン:2020/8/27(木)

19:48

#### 6166. 今朝方の夢/無限の詩と一編の小説

時刻は午前7時を迎えようとしている。昨日の天気予報とは少し異なり、今は雲は多いが晴れている。どうやら今日は、午後から夕方にかけて少しばかり雨が降るらしい。

---

昨日と同様に、今日もまた少し鼻水が出る。いつも私は、季節の変わり目にこうした症状を経験する。変わり目に差し掛かった時にそれを経験するというよりも、季節が完全に新たなものに移行した直後にこうした症状が出ると言った方が正確であり、季節が完全に秋に移行したのだと知る。

今朝方はそれほど印象に残る夢を見なかった。とは言え、少しばかり記憶に残っていることがある。夢の中の私は、欧州のどこかの街にいた。その街の人通りの少ない広場かどこかで、日本人のサッカー選手と話をしていた。その選手と話をしていたのは、その国の文化や教育に関するものだった。

その他に見ていた夢として、先日依頼を受けて執筆したある原稿の最終版が送られてきて、見ると手直しをする必要が全くないことがわかって安堵した。先方の編集担当の人が上手く編集してくれたのだとわかり、その方の仕事を労った。そのような夢を今朝方見ていた。実際のところは、もう少し夢の場面があったような気がする。いずれにせよ、今朝方の無意識の世界は落ち着いていたようだ。

運命を生きる自由を体現して日々を生きること。そのような生き方が日々実現されている。今日もまた自分の運命を自由に生きて行く1日になるだろう。

今日はオランダ時間の正午から、慶應大学の前野先生との対談イベントがある。午前中は、その対談に向けて、前野先生の書籍を読み返すことをしたい。昨日は結局、経済学関係の書籍を読んでおり、その後、社会の持続的発展を志すオランダの銀行や投資ファンドについて調べていたこともあり、先生の書籍を読み返す時間があまり取れなかった。初読の際に下線を引いたり、書き込みをしたりした箇所を中心に読み返して対談に臨もう。

昨夜も改めて、自分は音楽を通じて小説を書きたいわけではないことについて考えていた。自分が書きたいのは音楽を通じた詩である。そして、日々綴っていく無限の詩が人生の最後に1つになったとき、巨大な一遍の小説のような物語が顕現してくれればと願う。毎日描く絵についても同様だ。それも詩なのだ。日々の営みの中で湧き上がる感覚や感情を詩として音と絵の形にしていくこと。それを絶えず絶えず行う。今日も明日もそれを行う。

---

音楽理論と作曲理論の学習もまた旺盛に行なっていきたい。今は本当に毎日ゆっくりとそれを進めているが、どこかで集中的に学びを深める時期を設けようかと思っている。年内は美学、経済学、政治学、社会学、霊性学、批判理論や批判的実在論などの哲学を中心に読書を進めて行く予定のため、音楽理論や作曲理論のための読書にはあまり時間が割けないだろうが、作曲実践を通じて少しずつ理論的なことを学習していこう。そうした小さな積み重ねと、どこかで集中的に学習することを織り成していこう。フローニンゲン:2020/8/28(金)07:08

### 6167. オランダのオルタナティブバンクのトリオドス銀行について

時刻は午前7時を迎えた。今、穏やかなそよ風がフローニンゲンの街を通り抜けている。空は曇っているため、今朝は朝日を拝むことができそうにない。

昨日、今年の秋の一時帰国に向けて、行きの際にお世話になるブリティッシュ・エアウェイズについて調べてみたところ、どうやら経営状態が良くないらしい。パイロットの解雇の話などが出てきているようであり、ロンドンから関空への便も運休となっている。帰りにお世話になるフィンエアーは、すでに10月から関空での運行を発表しているが、ブリティッシュ・エアウェイズについてはまだそのような発表がない点が気になる。一応、現在のところ、東京に向かう便については数は少ないが復旧しているようなので、今後のブリティッシュ・エアウェイズの対応を待ちたい。

ブリティッシュ・エアウェイズは、2019年の4月に20年振りに関空に飛ぶようになったようであり、そこからの1年の間にコロナを受けて運休になるというのは、何かとても残念な話だ。そもそもロンドンと関西を結ぶ唯一の直行便は、JALが2009年まで運行していた1つの便しかなかったことを知り、少しばかり驚いた。

社会人の頃に大阪に住んでいた時に、米国西海岸の大学院の見学に行く際に関空にはお世話になったし、また実際に留学をする際にも関空を使ったのを覚えている。私に関空を利用したのは人生においてそれぐらいしかないが、関空も大きな空港として日本では大事な役割を果たしていると思っただけに、ロンドンとの直行便がそれほどまでに少なかったことを驚いたのである。政治経済的な観点から、関空はやはり成田空港と比較して影響力が随分と小さいのかもしれない。

---

昨日は、通称「オルタナティブバンク」と呼ばれるものについて調べていた。それは、金融活動を通じて社会に貢献し、社会の持続的発展を目指す銀行のことを指す。オルタナティブバンクは、別名「エシカルバンク」「ソーシャルバンク」「サステナブルバンク」などとも呼ばれる。特にドイツやオランダを中心に、近年欧州ではこれらの銀行の広がりが見えている。融資の与信判断の際には、融資先は再生可能エネルギー、無農薬農業、フェアトレードや他の社会的企業に限られ、核を含めた武器、そして環境に有害な事業を行なっている企業へは融資をしないということが守られている。融資先の業界は、再生可能エネルギー、無農薬農業、フェアトレードに加えて、教育、ヘルスケア、マイクロファイナンスなど多岐にわたっているとのことだ。

オランダで有名なオルタナティブバンクは、トリオドス銀行 (Triodos Bank) であり、ここはプライベートバンキングサービスも提供している。融資先・投資先の中でも、オーガニック食品関係の企業へ融資や投資を行なっていることにとっても共感しており、ブティック型の老舗のプライベートバンクではなくて、トリオドス銀行のプライベートバンキングサービスの活用も検討したい。

今私が使っているABNアムロ銀行におけるプライベートバンキングサービスにおいても、社会の持続的発展を目指す企業の株式や債権を積極的にポートフォリオに組み込んでいるようなのだが、トリオドス銀行の理念と実践にはより共感するものがある。

トリオドス銀行以外も、ハーグに拠点を置く、NN Investment Partnersという投資ファンドも社会の持続的発展を目指した理念に基づいて投資活動を行なっていることを知った。小さなアクションかもしれないが、そうした銀行やファンドに投資することによって、社会の持続的発展に微力ながら貢献していこうかと思う。こうした小さなアクションが拡大されることを望み、社会の幸福に資するような会社がこれからもっと増えてきて欲しいと思う。フローニンゲン:2020/8/28(金)08:05

## 6168. 社会に蔓延する音響兵器

時刻は午後7時を迎えた。今、穏やかな夕日がフローニンゲンの空に浮かんでいる。

今日は午後に少しばかり雨が降ったが、今は雨が止み、平穏な雰囲気か包んでいる。本日の正午には、慶應大学の前野先生との対談があった。先日行わせていただいた中土井遼さんとの対談と同様に、今日の前野先生との対談もとても濃密な時間であり、2時間があっという間に過ぎて

---

---

いったように思う。このように文章の形で自分の考えを書き出していくこともとても有益だが、改めて話すという行為、しかも対話を行うということの力について考えさせられるような時間だった。

人は話すことによって何かが開いていくのだ。言葉を話し、それを聞いてもらえて、対話が実現する時、そこに何かが開くのだ。話をしている方だけではなく、話を聞いている方にも何かは紐解かれていく瞬間があるということ。それが対話の持つ魅力であり、醍醐味であるように思う。

そよ風の音が聞こえてくるかのような穏やかな雰囲気。夕日の声までも聞こえてきそうな世界が目の前に広がっている。

この世界に満ち溢れる様々な音たち。彼らの存在について考えていると、人工的に生み出された「音響兵器(sonic weapons)」のような音たちはなんとかならないものかと考えてしまう。例えば、車のクラクションや工事の音などは、間違いなく心身に悪影響を及ぼすであろう。おそらくそうした実証研究の成果はすでに出ているはずなのだ。それでもこの社会には音響兵器的な悪音が至るところに存在している。

科学でそうした音の悪影響が判明したところで、それが社会実践に適用されないのであれば、科学とは一体なんだろう。真の領域とは一体なんだろう。いやそもそも、あのような音を心地良いと感じる人はいないはずであろうから、ああした音の生みの親は善意識が欠落していたのではないだろうかと思ってしまう。そして、そうした音を当たり前のものとして受け止める私たちの善意識もいかほどだろうか。それに対して何も建設的な批判を加えないというのもまた善意識の欠如の現れなのではないかと思う。またそもそも、あのような音は美しくないのだ。

ああした音を美しいと思う人が一体何人いるだろう？いないのであれば、なぜあのような音を生み出すのか、そしてまた私たちはなぜあのような音が存在していることを許容するのだろうか。ここには今度は美意識の欠落も垣間見える。そうなってくると、この世界は真善美に関する意識のどれもが欠落している、ないしは極めて未熟なのではないかと思ってしまう。

夕方に降った夕立のおかげで、季節は秋に入ったが、依然として青々としている街路樹たちが黄金色に輝いている。その輝きの音。それは「肉耳」では聞こえない。だが、「心耳」や「魂耳」を通じてであれば、きっと街路樹の葉の輝きの音が聞こえるはずなのだ。

---

---

ヘンリー・デイヴィッド・ソローやジャン・シベリウスが営んだような森の中での生活。その実現に向けて静かに人生が進んでいく。

森の中の虫の音や小鳥たちの鳴き声は、脳波をアルファ波にし、リラックスをもたらしてくれる。自分にとっては穏やかな波の音も好きだ。自然音の豊かさの中で生活すること。そしてそうした生活を通じて得られたものをこの社会に還元していくこと。それを近い将来に実現させよう。いや、それはもう実現させようという意思が介入するまでもなく実現されるだろう。

心身に悪影響を与えるであろう数々の人工音の中で、車のクラクションの音について少しばかり考える。クラクションは、クラクションを押す方も聞く方も不快な気持ちにさせる。聞く方は通りかかった歩行者や近隣住民などを含めると、より大きな関係者を巻き込むことになる。近くの動植物や微生物たちまで考慮に入れれば、その害がどれだけ大きいかわかるのではないだろうか。

クラクション以外にも、救急車やパトカーの音もなんとかして欲しい音である。もちろん、それらの音には社会的な機能があることは確かだが、そうだとでももっと別の音でいいように思えてくる。いっそのこと、車のクラクションは、ベートーヴェンの『交響曲第5番(運命)』の出だしの音(「ジャジャジャジャーン」)にしてしまったり、救急車やパトカーの音はあえて心を急かし、かき乱すようなあのような音ではなく、せめてグリーグの『抒情小曲集 第8集:トロールハウゲンの婚礼の日』のサビの音にならないだろうか。

この社会に蔓延する音響兵器的な悪音。それらは私たちの心を不必要に攻撃的にしたり、不安にさせたりする。音というのは抗うことができない形で私たちの心身の中に入ってくるのだ。そうした音が悪音であっていいはずはない。そうではないだろうか。私たちの心は、社会的に作られた音によって支配され、蝕まれている。このテーマについては、本日届けられた“Musical Truth”という書籍の中で詳しく考察されているはずだ。ここからまた考えを深めていこう。フローニンゲン:2020/8/28(金)19:45

### 6169. 暴力的な声・治癒と変容をもたらす声/無自性と悟り/数字の「3」

時刻はゆっくりと午後8時に近づいている。秋を迎え、日が沈む時間が早くなったとは言え、8月末のこの時期は、この時間帯の外はまだ明るい。完全に日が沈むのは午後9時頃だと昨日改めて確

---



---

認した。先ほどは、この社会に蔓延している音響兵器的な音について書き留めていたように思う。車のクラクションや工事の音を含めて、心身に不快感をもたらす音はこの世界に多く存在している。

歴史的には、ナチスドイツがワーグナーの曲を用いて民衆の心をコントロールしていたことは有名な話だし、今でも政治的なプロパガンダやビジネスのマーケティングの一環として様々な音が意図的に用いられていることはよく知られたことだろう。そうしたこと以外にも、普段私たちが声帯を通じて発している声にも意識を向けてみる必要があるのではないかと思う。私たちの声が、時に音響兵器的になっていないだろうか。

人は言葉で人を傷つけるだけではなく、声のトーンや声色によっても人を傷つけてしまうのだ。それは身体や脳の神経回路に文字通り傷痕を残すだけではなく、心にトラウマという傷も負わせる。私たちが日々発する声は、癒しや変容をもたらしてくれる声だろうか。私たちが日々意識できることはたくさんある。

私たちは孤立した形で実体として存在しているのではなく、あらゆるものとの関係性の中で存在しているということ。それそのものとして単独で存在するものは何もないという「無自性」の考え。今日の自分もそれを実感させてくれる形で生きていた。今日という日をそのように生きることができたということ。そのように生かしてもらえていたということ。それに対して感謝の念が湧き上がる。

夕日は相変わらず西の空に浮かんでいるが、空の大部分は雨雲で占められている。雨雲の向こう側にある青空。青空の向こうにある成層圏。成層圏の向こう側に広がる大宇宙。悟りとは、そうした大宇宙を見ようとするのではない。自分自身がそうした大宇宙に他ならないと気付くこと。それが悟りの一つの知覚体験なのではないだろうか。悟りとは、一点の雲もないような青空を見ようとするのではなくて、自分がそうした青空そのものであることに気づくことだ。

書斎の目の前には街路樹があつて、それがそよ風に揺られている。自己は街路樹であつて、そよ風なのだ。そよ風が吹き抜ける始点から終点の時間もまた自己であり、それらの時間が過ぎ去った後の時間もまた自己である。

そう言えば先日、数字の「3」が出てくる夢を見ていた。私はそれを、「真善美」の3つの領域に対する自分の関心の現れ、及びそれら3つの領域の包括的な探究と実践に導くものだと解釈していたよ

---

---

うに思う。先ほど偶然、敬愛するバッハもまた3という数字をこよなく愛していたことを知った。バッハにとって、3という数字は「父と子と聖霊」の三位一体を表していたのである。

本当に偶然だが、先ほどバッハのゴルトベルク変奏曲が頭の中に流れていて、バッハは3という数字を一番意識して作ったのがこの変奏曲だったそうだ。3という数字とバッハのとのつながり。このあたりもまた見過ごせない何かがありそうだし、その他にも何か繋がりがあるような気がする。そう、自己が他の全ての存在と深層的に繋がっているのであれば、無数のシンクロニシティ的つながりをそこに見出すことができるだろう。フローニンゲン:2020/8/28(金)20:01

### 6170. 日本へのフライトに関して

時刻は午前7時を迎えようとしている。今、辺りはとても穏やかであり、この時間になるともう随分と明るい。今朝はそよ風が時折吹くぐらいであり、とても優しげな世界が辺りに広がっている。どうやら今日は、午後に少々雨が降るようなので、昼前に近所のスーパーに買い物に出かけようと思う。今日は午後にオンラインミーティングが1件ほどある。それ以外の時間は、創作活動と読書に充てよう。

昨日は前野先生との対談に向けて、先生の書籍を再読していた。今日からは再び経済学書を読み進めていこうと思う。まずは”What’s Wrong with Economics?: A Primer for the Perplexed”から読み進め、仮にそれが早く読み終わったら、“Economics for the Common Good”を読み進めていきたい。

昨日もまたオランダのアマゾンから5冊ほど書籍が届き、そこにはシュタイナーの経済思想に関する書籍もある。その書籍を読むことは今から楽しみであり、届いた書籍を積み上げた山を見ると、その書籍を読むのは来週のどこかのあたりになるだろう。一括注文後に見つけた10冊の書籍については、今日か明日に注文をしておきたい。

昨日、今年の一時的帰国の際に利用するブリティッシュ・エアウェイズについて調べていたことを日記に書き留めていたように思う。ブリティッシュ・エアウェイズはイギリスのフラッグシップの航空会社なのだが、日本に向かう便があまり多くないことが意外であった。また、関空にこれまで20年間も飛んでいなかったことが驚きであった。

---

帰りの便で使うフィンエアーは、すでに10月からの関空での運行を発表している。それを見た時に、行きの便もフィンエアーにしたら良かったかと思っただが、当初は2つの航空会社を比較したいと思っていたのである。またそもそも、自分が望むような日程の行きの便がフィンエアーにはなかったように記憶している。

成田や羽田に向けては、本数は少ないが、欧州からも日々フライトが飛んでいることを見ると、今回関空を選んだことも少しばかり仇になっていると思っただが、それもまた何かの運命だろう。今はただ、ブリティッシュ・エアウエイズが10月の関空での運行再開を早く発表してくれることを祈るだけである。そのようなことを考えていたが、今回はどちらもJALのコードシェア便ということもあり、行きに関してフィンエアーかJALに変更できないかと考えている。仮にブリティッシュ・エアウエイズの便がキャンセルになれば、同じ航空会社内で日程の変更を行うことが可能だが、コードシェア便についても可能なのだろうか。そうであれば有り難く、またキャンセル前に他の航空会社のコードシェア便に変更できたらさらに有り難い。正直なところ、フィンランドに関心を強く持っている今の私にしてみれば、ロンドンを経由して日本に帰るのではなく、ヘルシンキを経由して日本に帰る方が嬉しい。私は、ヘルシンキの国際空港の雰囲気が好きであり、ラウンジもとても広く明るく素敵である。また何よりも、ラウンジではサウナに入れるものもあり、とても寛ぐことができるのだ。

明日か明後日に、フライトのキャンセル前に他の航空会社のコードシェア便に変更が可能かを電話で確認してみよう。今のところブリティッシュ・エアウエイズが10月に関空の運行について何も言及していない以上、すでに10月からの運行を再開すると発表しているフィンエアーにフライトを変更できるのであれば、そちらの方が安心だ。まだ関空に降り立つことが確定していないので、日本での宿泊先の確保はフライトが飛ぶことが確定してからにしようかと思う。おそらく直前になっても、今の状況下においてホテルや旅館が満席になることは考えにくいだろう。いずれにせよまずはフライトの確定が先決だ。フローニンゲン:2020/8/29(土)07:10

#### 6171. 季節の変化への適応の落ち着き/トリオドス銀行について

時刻は午前7時を迎えた。辺りを微風が通り過ぎてゆく。その微風が美風であることに気づくこと。それが大切だ。今朝方はそれほど記憶に残る夢を見ていなかった。どこか日本以外の国の街中で、日本人の女性友達と話をしていたような記憶がある。そこには2人ぐらい友達がいたのだろうか。今日

---

はそれぐらいしか夢について覚えていない。無意識の世界がどうやら落ち着いているようだ。落ち着きに関して言えば、今朝起床した時にも毒素を排出するような黄色鼻水が出たが、今はもう落ち着いている。喉のイガイガもほとんどなくなったので、季節の変化への適応が無事に終わりに向かっていることがわかる。

先日のアテネ旅行から帰ってきたタイミングでファスティングをしたおかげか、今回の変化への適応に伴う症状はいつもより軽かった。いつもはより鼻水が出て、1日は随分と喉が痛い状態が続いていたのだが、今回はそれほどの症状が出なかった。ファスティングと季節の変化への適応に伴う症状との相関関係については、今後もまた探求を試みよう。

昨日の日記の中で、オルタナティブ・バンクとして、オランダのトリオドス銀行について言及し、バッハの音楽について言及していたように思う。両者に共通することがあることに気づいた。バッハは、「3」という数字を愛していたことは昨日の日記で書き留めた通りである。なんとトリオドス銀行もまた「3」という数字を大切にしているようなのだ。

そもそもこの銀行の名前の“Triodos”の“tri”は3を表している。それが何を意味しているかというところ、ギリシャ語の「3つの道」に由来するらしく、3つの道とは、金融、社会性、倫理性のことを指すとのことだ。つまり、トリオドス銀行は、企業活動にこの3つの視点を盛り込むことによって、金融を活用してより良い社会を実現しようとしているのだ。倫理性に関して言えば、この銀行の融資先・投資先は全て、持続可能な社会を目指す企業に限っていることとつながっている。また、トリオドス銀行のユニークな点は、この銀行の利用者に対して、銀行の融資・投資方針だけを示すのではなく、融資先・投資先も開示するという「見える化」を徹底している点である。利用者のお金がどこに行き、どのように使われたのかを明示することはとても大切なことのように思える。そうした透明性があるのは、シュタイナーの思想をもとに設立されたドイツのGLS 銀行も同じである。

オランダに住んでいるということもあり、そしてこの国を愛しているということもあり、さらには投資を通じた社会の持続的発展に関心があることが重なって、トリオドス銀行の利用についても検討していこうと思う。トリオドス銀行が提供するプライベートバンキングサービスを活用すれば、単に個人の資産を保全するだけでなく、社会にとって意味のある形で資産運用ができる。かねてから有機食品

---

などに関心があった私にとって、トリオドス銀行もその分野に融資・投資を積極的に行っていることはとても共感する。

トリオドス銀行はそもそも、1960年代に顕在化した欧州での酸性雨や土壌汚染などの公害・環境問題への対応を強く意識した市民が中心になって作ったものであり、銀行の設立時から今に至って、その問題意識を持ち続けている点も共感する。トリオドス銀行については今後も引き続き注目をし、調査を続けていこう。フローニンゲン:2020/8/29(土)07:35

## 6172. 今日の雑多な考え事

時刻は午後7時半を迎えた。今、とても穏やかな夕方の世界が広がっている。空には穏やかな夕日が輝いていて、落ち着いたそよ風が吹いている。振り返ってみると、今週も本当にあっという間に過ぎていった感じがある。昨日は前野先生との対談があり、今日も1件ほどオンラインミーティングを行った。

明後日からはまた新たな週を迎え、来週末にはハーグから友人がフローニンゲンに遊びに来てくれる。友人と約束をしたのは随分と前のことだったように思うが、もう来週末に約束の日が来ることにわかに信じられない。

今年の秋の一時帰国もあれよあれよというまにやってくる印象だ。今日はふと、いつか必ず日本全国を巡る旅をしようと思った。母国日本は、日本人である自分が旅行者として訪れる1番の国だ。それはもう揺るぎないということを改めて思った。非居住者として日本が最良の国であり、居住者として日本が避けたい国に挙がってくるというのはとても複雑な思いがする。しかし、だからこそ日本に関与していく形があり、それが自分の関与の方法なのだと思う。そのようなことを午後に考えていた。

午前中にヨーガ仲間の友人のブログを見ていると、とても興味深いことが書かれていた。「もし合わないことによるレッスンに効能があるとしたら、会えないからこそ互いを求める気持ちが醸成されることなのかもしれない。そしてその思いが間違いなく人を変容させる。その先に治癒もあるのかもしれない」という言葉がそこに書かれていた。今のコロナ下において、またこれまでの自分の生活環境

---

下を考えてみた時に、とても響くものがあった。物理的に会えないからこそその思いの醸成と、それを起点にした変容と治癒を促す関係性。それはまた新たな関係性と言えるだろうか。

これまでも形を変えてそうした関係性の形があったかもしれないが、今の社会情勢において、物理的な距離を超えながらにして、お互いの変容と治癒をもたらしてくれるような関係性を育んでいくことは大切なことのように思う。

今日の夕方に買い物に出かけた時、郵便受けに4冊ほど書籍が届けられていた。先日に50冊ほど一括して注文した書籍が、ここ数日間の間にパラパラと届けられてくる。本日届けられた書籍の中に、フランスの哲学者のジャン・フランソワ・リオタールの“Libidinal Economy”というものがある。リオタール的な観点で言えば、際限のないリビドーに突き動かされた経済活動の蔓延と、際限のない煩悩に突き動かされた経済活動の蔓延。それについて思いを巡らしていた。

性衝動に加えて、それ以外の種々の煩悩が複合的に混ざり合い、それらに取り込まれる形で無意識的に行われる種々の消費行動。それは歯止めが効かず、それは無限ループに陥りながら、さらにその消費行動が強化学習的に強化されていってしまう。これもまた別種のラットレースだろうか。

そのようなことを考えながら、土曜日がゆっくりと終わりに近づいている。今日はこれから少しメールの返信をして、時間があれば、明日に再度一括注文する書籍の吟味をしたい。可能であれば、アマゾンのカートの中に次々と購入予定書籍を入れていってしまおう。実際の注文は明日でもいい。フローニンゲン:2020/8/29(土) 19:51

### 6173. 「一次元的世界」に対する偉大な拒絶

時刻は午前6時半を迎えようとしている。今、少しずつ辺りが明るくなってきている。

今日は日曜日だ。そして早いもので来週の火曜日からは9月を迎える。10月中旬の一時帰国まで本当にあっという間のような気がする。今続々と到着している書物をゆっくりと読み進めていけば、秋の一時帰国はすぐにやって来るだろう。

---

書齋の机の上に積み上げられた書籍をどのような順番で読み進めていきたいかを考えていて、今日からは3冊ほど連続して経済学書を読んだ後に、シュタイナーの経済・社会思想に関する2冊の書籍を読んで行こうかと思う。その後に少し美学か霊性学の書籍を挟み、再び経済学の書籍を読み進めていこうかと思う。

本日取り掛かるのは、“Economics for the Common Good”という書籍だ。こちらは注記を含めると500ページほどの書籍だが、可能であれば本日中に初読を終えたい。もしそれが無理そうであれば、明日に橋渡しする形で、明日中に初読を終えようと思う。著者のジャン・ティロールは、フランスの経済学者であり、2014年にノーベル経済学賞を受賞している。次に読もうと思っていた“Development as Freedom”の著者であるアマルティア・センもかつてノーベル経済学賞を受賞しており、ここからの2冊はノーベル賞受賞者の書籍となる。

ノーベル賞受賞者の思想がいかほどかを知る上でもこの2冊を読み進めることは楽しみだ。おそらくは、シュタイナーが経済社会思想を展開している“Toward a Threefold Society: Basic Issues of the Social Question”や“Social Threefolding: Rebalancing Culture, Politics & Economics”、ハーバート・マルクーゼの“One-Dimensional Man: Studies in the Ideology of Advanced Industrial Society”の方が洞察が鋭いように思えるが、それでも2人のノーベル経済学賞受賞者から何かしらのことは得られるだろう。ノーベル経済学賞を含めたノーベル賞は、政治経済的な意図が多分に組み込まれた作為的な賞である、というバイアスをいったん横に置き、その後に2人の書籍を読み進めていくことにしよう。そうでなければ、得られるものも得られなくなってしまう。

ハーバート・マルクーゼが上述の書籍の中で、まさにタイトルにあるように、「一次元的人間」について警鐘を鳴らしていたことから得ることは多分にあるだろう。行き過ぎた経済社会は、人間の既存の欲望を掻き立てるだけでなく、歪んだ新たな欲望さえも生み出し、それらをマスメディアやマーケティングなどを通じて既存の生産消費システムに組み込み、その巨大なシステムの中に人間を組み込んでいる。その結果、人間の行動や思考は極度に歪んだものになり、画一的、すなわち一次元的なものに墮してしまった。そうした事態に対してマルクーゼは、徹底して批判精神を働かせ、そうした一次元的世界の流れに対して抗っていくことの大切さを説いている。

---

マルクーゼはそのような姿勢に対して「偉大な拒絶(great refusal)」という言葉当てている。本来、人間の偉大さとは別のところで発揮するべきなのではないかと思ってしまうが、マルクーゼの時代と変わらず、いやむしろ一次元的人間の生産はテクノロジーの発展やその他の社会要因によってさらに拡大しているように思えるため、尚更そうした偉大な拒絶が求められているように思う。フローニンゲン:2020/8/30(日)06:47

#### 6174. 「マクドナルド化」と非人間化/今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えようとしている。辺りはとても静かで、そよ風が吹いている。今日は1日を通して曇りの時間帯が多いようであり、午後には少しばかり小雨が降る時間帯があるようだ。

社会の中で合理化が押し進められながらも、そこに生きる人間たちが合理的な思考ができないという皮肉さについて考えていた。社会学者のジョージ・リッツァーは、デジタル化が進む現代社会はより一層「マクドナルド化(McDonaldization)」が進行していると指摘している。端的には、過度な合理化によって、人間が管理され、商品のようにみなされるだけではなく、人間の行動がその仕組みへフィードバックされることにより、さらにその仕組みが強化されるというループ構造があることをリッツァーは指摘している。

社会の中で合理化が進めば進むほど、人間が合理的な思考を発揮することから逸脱していき、管理され、商品化されるというのは本当に皮肉な話であり、この点もまた先ほどの日記で言及していたハーバート・マルクーゼで言うところの「偉大な拒絶」の態度を発揮していく箇所かと思う。

昨日は記憶に残る夢をほとんど見ていなかったが、今朝方はいくつか印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、小中学校時代を過ごした町にいた。私はなぜだか、成人になってから知り合った2人の知人と自宅に向かって帰っている最中だった。私たちは自転車に乗っており、先頭に一番年長の友人がいた。その次にもう1人の友人がいて、最後尾にいた私は真ん中の友人と話をしながら自転車を漕いでいた。

しばらくして気づいたが、先頭にいる友人も話に入りたそうにしていたのだが、自転車の隊列上、それは少し難しく、結果として先頭の友人を無視するような形で私は真ん中の友人と話を続けた。



---

すると、途中で信号に捕まった。そのタイミングは、先頭の友人に声をかけるチャンスだったが、真ん中の友人との話に盛り上がっていたこともあり、私は先頭の友人に声をかけることをしなかった。そもそもその友人は私よりも干支ひとまわり分ほど歳が離れている立派な大人なのだから、話に入りたいのであれば勝手に入って来るだろうと思っていた。一方で、私はその友人が構ってほしい気持ちを絶えず持っていることもこれまでの関係上知っていた。

私は彼のそうした無意識的な欲求を知りながらも、それをあえて無視するような態度でいたのである。その友人の対応は少し面倒だなと思ったのと、少しばかり1人になりたいと思ったので、信号に捕まったことを好機捉え、私は横断歩道を渡って反対側の道に行こうと思った。そこで私は2人の友人と別れた。横断歩道をいざ渡ろうとすると、いつの間にやら先ほどまで乗っていた自転車が消えた。その代わりに、私の足元には、テニスボールぐらいの大きさの白いゴムボールがあった。

私はそれを使ってサッカーのドリブル練習をするかのように、そのボールを転がしながら横断歩道を渡り切った。すると突然、物凄い勢いの雨が降り始めた。突然の土砂降りに驚いたが、私はそこから近くのスーパーに行くことにした。いざ歩き始めようとした時に、私はボールのコントロールを誤ってしまい、横断歩道を渡り切ったところにある溝にボールを落としてしまった。

もう雨脚が強くなっていたので、溝を流れる水の勢いは強く、溝に落ちたボールはすぐに海の方に流れていってしまった。私は一瞬それを残念がったが、今はとにかくスーパーに駆け込むことが先決だと思い、先を急いだ。ところが途中の小さな空き地でまたボールが転がっていることを発見し、今度はちゃんとしたサッカーボールだったので、私は嬉しくなり、その場でしばらくリフティングをすることにした。ただし、意外と途中でボールを地面に落としてしまい、リフティングの技術の低下を身を持って知った。このボールを家に持って帰って、今日からは毎日練習しようと思い、いざスーパーに向かって再度走り始めたところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は東欧諸国のどこかの街にいた。大きな広場に面した建物の中に私はいて、そこで動画の撮影と編集をする学生たちと過ごしていた。彼らは何か映画のようなものを撮影していて、プロが使うような機械を用いて撮影と編集を進めていた。それらの機械は私にとってとても目新しいものだったので、どのように使うのかを彼らに根掘り葉掘り聞き、色々と勉強になった。

---

そこでふと私は自分の足を見ると、自分が素足であることに気づいた。そして驚いたことに、私の足の指の本数は3本になっていた。親指が2つあり、その横にとても小さな指があって、端っこの2つの指はなくなっていた。私はそれを見て、靴の履き方が悪かったからそうなったのかと思ったが、特に痛みもなく、3本しか指がないことに違和感をあまり感じなかったので、病院に行く必要はないかと思った。今朝方はそのような夢を見ていた。

実際にはあと1つだけ印象的な夢があったはずなのだが、その記憶はない。感覚として、確かにもう1つ夢があったということだけが確かであり、その夢の記憶はどこかに隠れてしまった。

最後の夢の場面で、足の指が3本であったことはとても興味深い。ちょうど一昨日に、バツハと「3」という数字でつながっていることについて書き留めていたので、またしても3という数字が夢の中に登場したことは何か示唆深い。足の指が3本であるというのはどのような意味を持っているのだろうか。何かと三位一体としてこの人生を歩いていけということなのか。やはり真善美を通じて、この足で人生を歩いていけということなのか。それとも何か他の意味があるのか。そのあたりを日々の営みを通じてゆっくりと探求していこう。フローニンゲン:2020/8/30(日)07:18

#### 6175. アマルティア・センの書籍を読んで/書籍の一括注文の追加

時刻は午後7時を迎えた。今、日曜日がゆっくりと終わりに向かっている。この瞬間は、少しばかり空に雲が覆っていて、夕日を拝むことができない。明日からは幸いにも天気の良いようなので、明日は午後に街の中心部のオーガニックスーパーに立ち寄ろうと思う。近所のスーパーで買いたい物もあるので、2つの店をしようかと思う。

今日は創作活動に時間を充てるよりも、読書に時間を充てていた。そのおかげで、早朝に書き留めていたように、今日は2冊ほどの経済学書を読んだ。2冊目に読んだアマルティア・センの書籍の中で、センが指摘していたことが印象に残っている。それは、発達というものを、何かができるようになるプロセスというよりも、何かをできなくさせている不自由さからの解放のプロセスであるとする考え方である。こうした発想はあまり発達心理学者にはなく、社会変革を志向する経済学者ならではの発想かと思う。端的には、構造的に高次元な領域に到達することを強調するよりも、健全な発達を阻んでいるものを取り除いていくことに光を当てることも忘れてはならない。

---

抑圧しているものを取り除いていくという発想は、ジョン・ロック、ないしはロイ・バスカーでいうところの「実践的アンダーレイバリング」、つまり自由を抑圧し、発達を阻害するガラクタを取り除いていくという発想にとっても近い。

そのようなことを考えながら、現代社会を覆う種々の貧困さについて考えていた。大部分の人たちの金銭的貧困さ、潜在能力を開花させる機会の貧困さ、心や感性の貧困さ、そうした種々の貧困さで溢れる社会において、センの書籍は社会変革に向けた考え方と実践の方向性を示してくれていると思う。本書を成人発達理論の観点からだけではなく、その他の様々な領域の観点を通じて、少し時間を空けてから再度読み返していこうと思う。

今日は夕方に、先日の一括注文に加えて、再度書籍を注文した。ちょうど数日前に和書を日本のアマゾンから8冊ほど購入し、協働者の方の自宅に送らせていただき、今日は10冊程度の購入にしようと思っていたのだが、結局17冊ほど書籍を購入した。イギリスのアマゾンから4冊、オランダのアマゾンから12冊、ドイツのアマゾンから1冊ほど購入した。購入した書籍は下記のものになる。

- 1 Parallels and Paradoxes: Explorations in Music and Society
- 2 Music at the Limits
- 3 Musical Elaborations
- 4 Everything is Connected: The Power of Music
- 5 Music Quickens Time
- 6 Token Economy: How Blockchains and Smart Contracts Revolutionize the Economy
- 7 Composer's World: Horizons and Limitations
- 8 The Classical Music Book: Big Ideas Simply Explained
- 9 The Sociology Book: Big Ideas Simply Explained
- 10 The Politics Book: Big Ideas Simply Explained
- 11 The Philosophy Book: Big Ideas Simply Explained
- 12 How Philosophy Works: The concepts visually explained

---

13 The Economics Book: Big Ideas Simply Explained

14 The Ecology Book: Big Ideas Simply Explained

15 How Food Works: The Facts Visually Explained

16 How the Brain Works: The Facts Visually Explained

17 How the Body Works

個人的に、DK出版の“〜”Big Ideas Simply Explained”のシリーズと、“How ~ Works: The Facts Visually Explained”のシリーズの説明と図解の分かりやすさは素晴らしいと思い、今回は改めていくつかの分野に関して、図鑑のようなこのシリーズの書籍を随分と購入した。今日の注文をもって8月の一括注文を終えることにし、これから続々と届く書籍たちと一緒にゆっくりと時間を過ごしていきたいと思う。フローニンゲン:2020/8/30(日)19:30

### 【追記】

上述の、「実践的アンダーレイバリング」というのはどこかファスティングをしてデトックスを行うようなイメージに思えてくる。意識の発達を実現させる上で、身体の健全性を確保することは極めて大切であり、身体の健全性を実現させるためには、これまで蓄積した様々な毒素を排出していく必要がまず求められる。思想上・実践上のガラクタを取り除いてくアンダーレイバリングという試みは、そうした毒素の排出行為と似ており、それは個人と組織の発達を実現させる上でかなり重要なことではないかと思う。むしろ、それが最初のステップなのではないかと思わせられるぐらいに重要だ。毒素や不要物でまみれた個人や組織に新たな変容を実現していく根幹的な発達力はないであろうから。

### 6176. 今週末の予定と今日の読書

時刻は午前5時を迎えた。この時間帯はまだ辺りは真っ暗であり、とても静かだ。小鳥たちが遠方でかすかに鳴いているのが聞こえるぐらいで、その他には物音は聞こえない。

今日は1日を通して曇りがちのようだが、雨が降らないのは何よりだ。一方で、気温は17度までしか上がらず、最低気温はもう8度である。明日も同様に最低気温は8度だ。本当に肌寒くなったものである。今日はまだ8月なのだが、実際に今この瞬間は、長袖長ズボンといった格好をしており、冬の

---

時代を過ごす格好と同じである。唯一違うのはヒーターをつけていないことだけだ。ひよっとすると、来月末ぐらいからはもうヒーターをつけ始める必要があるかもしれない。それぐらいに肌寒い。

いよいよ今週末には、ハーグから友人がフローニンゲンに遊びにやってくる。土曜日の天気を確認したところ、小雨マークがついているが、友人がやってくる昼以降は天気もつようなので何よりだ。Groninger Forum内のレストランの中にオーガニックなものはなさそうなので、ランチは別の場所で摂るのが良いかもしれない。例えば、街の中心部から少し離れたRÅ SALATBARというレストランはこれまで注目していたオーガニックレストランであり、ここの食材は100%オーガニックであり、種々のボウル類はどれも美味しそうなのだ。ランチはここで摂り、その後Groninger Forumかどこかのカフェに行ってそこでゆっくり話すのがいいかもしれない。

カフェに関しても、レストランの近くに行きつけのオーガニックカフェがあり、そこだとゆっくり話ができそうだ。Groninger Forum内にもカフェはあるが、レストランと同様に、眺めや雰囲気は良いかもしれないが、オーガニックなものではないかもしれないので、今のところGroninger Forumを使うことはなさそうだ。とはいえ、一応外観ぐらいは見学したい。

今日は日曜日だが、いつもと同じような形で日々の取り組みを前に進めていこう。いや、今日はなんと月曜日であった。創作活動と読書。それらを中心にして自分の取り組みをじっくりと深めていく。今日の読書は、“Prosperity without Growth: Foundations for the Economy of Tomorrow”から始める。

昨夜の段階で、中身をパラパラと眺めたところ、本書は比較的早く読み終わることができそうなので、初読が済んだら、今度はルドルフ・シュタイナーが経済社会思想を展開している“Toward a Threefold Society: Basic Issues of the Social Question”を読もうと思う。昨日、本書に関しても中身をパラパラと眺めていた。すると、シュタイナーは随分と多くの書籍を通じて経済社会思想を紹介していたことを改めて知り、先日の一括注文の際には購入していなかった書籍については、また別の機会に購入しようと思った。それはおそらくこの冬かそれ以降になるかと思われる。結局今月は、75冊ほどの書籍を購入したので、それらをこれからじっくりと読み進めていこう。フローニンゲン：

2020/8/31(月)05:32

---

## 6177. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。先ほど一つ前の日記を書き終えたときに、今日は日曜日ではなく、月曜日であることに気づき、途中の記述を少し編集した。今日は月曜日だったのだ。

今日は午後に、街の中心部のオーガニックスーパーと近所のスーパーの2軒をはしごして、買い物に出かけようと思う。今週の金曜日の午後には、半年に一度の歯科検診がある。実は昨日予約を入れたのだが、いつもは直前だと予約が一杯なのに対して、今回はコロナの影響を受けてか、予約がガラ空きであった。今週の金曜日の午後3時に検診を受け、その足で街の中心部のオーガニックコーヒー専門店で、コーヒー豆を2種類ほど購入しようと思う。コーヒーの暖かさが滲みる季節となった。この店に立ち寄った後、ABN AMRO銀行に行き、なぜかiPad Proでうまくオンラインバンキングの登録ができないので、その問題の解決を依頼する。

それでは今朝方の夢について振り返り、その後に絵を描いて作曲実践に移って行くといういつもの流れに乗っていこう。夢の中で私は、新幹線に乗っていた。それは地元から東京に向かうものだった。

新幹線にはそれほど人は乗っていなかったが、私の近くにはちょうど小中学校時代の友人が2人座っていた。2人は通路を挟んで反対側の座席の窓際に座っていて、通路側の席には2人のポストンバッグのようなものを置いていた。私は2人に声をかけ、一方の友人は女性であり、ポストンバッグを上棚に上げるのが大変かと思ったので、私がそれを棚に上げた。それに対して友人は感謝の言葉を述べた。

ついでなのでもう1つのポストンバッグも棚に上げようとしたら、後ろから私に声を掛けてくる人がいた。振り向くと、そこにはまた別の友人(NI)がいて、どうやらそのポストンバッグは窓側に座っているもう1人の男性の友人のものではなく、その女性友達のものだったようだ。彼女はそのポストンバッグを足元に置き、その席に座った。そこから3人と一緒に話をしていると、母方の祖母が通路にやってきた。

どうやら私は大学受験を控えているらしく、受験に関しては本命の国立大学しか考えていなかったが、祖母は練習がてらある私立大学も受験してみてもどうかと私に勧めてきた。確かにそれは練習

---

---

がてらいいかもしれないと思い、また気分転換にもなるだろうと思ったので、その大学を受験してみることにした。そこで祖母にお礼を伝え、祖母と握手をしようとしたら、祖母の手が離れていき、どこかに消えてしまった。

そこからはその私立大学の受験について考えていた。そこは名門の私立大学であり、これまで対策など全くしていなかったもので、とりあえず過去問を見ようと思った。すると、偶然にも、近くに座っていた2人の白人男性がその大学の過去問集を持っていることに気づき、驚いた。ちょうど、もう1人小中高時代の親友(HO)が現れ、彼もその大学を受験したいと思っていたようなので、彼と一緒にその2人の外国人に声を掛け、過去問を見せてもらうことにした。早速私は数学の問題を見た。

その大学は私立の文系には珍しく、数学を試験科目にしている、それでいて難易度もなかなかのものだというのは知っていたので、まずはどれくらいのレベル感なのかを確かめた。もちろん入試なので満点を取れるはずはないと思っていたが、問題を見ると、対策することなしに問題が解けそうだという直感があった。試しにちょっと問題を解いてみようと思い、その場で友人と何問か問題を解いてみることにした。するとどうやら、自分が受け取った過去問集は比較的新しく出版されたものなのだが、親友が受け取ったのは随分と古い過去問集だということがわかった。そうしたこともあり、一緒に同じ過去問集の問題を解くことにした。受験の日までまだ時間があるので、これからは毎日学校の放課後にどこかの教室で過去問を解き、教室の黒板を使って自分が解説をしながら理解を一緒に深めていこうと親友と約束した。

次の夢の場面では、私はどこかの国の街の倉庫のような場所にいた。そこには私以外にもう2人ほど友人がいて、さらには小さな外国人の男の子もいた。どうやら私たちは、その男の子を何者かから守ろうとしているらしかった。その倉庫のような建物は2階建てになっていて、私たちは2階の窓から外の様子を見ていた。すると、2人の外国人の警察官が下にやっきたのが見えて、私たちを助けに来てくれたのだと思って安心した。

私たちはあらかじめシャッターを開けておき、警察が入ってこれるようにした。2人の警察官はシャッターをくぐって、私たちがいる2階の方に上がってきた。すると1人の警察官が、「騒がないでくれよ」と述べ、その言葉と同時に、持っていたライフル銃で私たちが守ろうとしていた小さな子供を撃った。その後、矢継ぎ早に私たち全員を撃った。ところが私は偶然にも友人の背後にいて、友人を貫

---

いた銃弾が私の右の腹の部分にぶつかったのだが、痛みは全くなかった。しかし私はそのまま地面に倒れ込んだ。地面に倒れ込んだ時に、もしかしたら自分は助かるかもしれないと思い、地面で息を潜めてじっとしていることにした。フローニンゲン:2020/8/31(月)06:04

### 6178. 種々の余裕と慈悲心/経済合理性に侵された教育

時刻は午前11時半に近づきつつある。空には雲が少しばかりあるが、晴れている。

つい今し方ふと、調べる余裕、考える余裕、行動する余裕、自分の内側を感じる余裕、そうした諸々の余裕があることに改めて感謝の念を持った。確かに、そうした余裕を持たせるための種々の工夫と物理的・経済的環境の整備をこの数年行ってきたわけなのだが、それが知らず知らずうまく機能していて、いつの間にかそれらの余裕の中で生きていることに気づいた。勉強し、考え、そしてアクションしていく余裕。そうした余裕に加えて、その瞬間の1つ1つの体験を味わう余裕があることには絶えず感謝しよう。

以前にも一度思い出したことがあるのだが、午前中にふと、サンフランシスコに住んでいた時のある思い出が蘇ってきた。サンフランシスコ市内のピア39から大学時代のゼミの友人とサイクリングに出かけ、ゴールデンゲートブリッジを渡ったところで、私があまりの寒さに震えていると、比較的若いアメリカ人の女性が駐車場の車から降りてきて、私にジャケットをくれたことを思い出した。

ジャケットを貸してくれたのではなく、文字通り、それを私にくれたのである。そのジャケットは引越しの伴ってもう自分の手元にはないが、その女性の慈悲心は今でも自分の心の中にある。あのような優しさを自分は他者に行動を持って示すことができるのだろうかと考えていた。

今、書斎の窓を閉め、冬と同じ出で立ちで過ごしているのだが、そうした寒さも相まって、あの時の記憶がふと蘇ったのだろうか。余裕に関する上述の感謝の念だけではなく、絶えず慈悲心を持ち、慈悲心が体現された言動を日々行っていくこと。それはまだまだ意識しなければできないことかもしれないが、いつかそれが無意識的に行えるようになるだろう。



---

今日はこれまでのところ、早朝の計画通りに2冊の書籍を読み終えた。正午を迎える前に2冊の書籍を読み終えている姿を見ると、読書がとても捗ったことがわかる。今日は午後、「一瞬一生の会」のための補助音声教材を作ったり、夕方近くには街の中心部に買い物に行く。そうしたこともあり、今日の読書はいったんこの辺にして、あとは夕食後に少しばかり行うことにする。

一旦経済学書から離れ、今日の夜と明日にかけての読書は再び美学に戻る。そして、明後日からは再び経済学に戻ろう。美学と経済学の往復をするような形で読書が進んでいる様子もまた興味深い。それは美学と経済学を統合する道の始まりを意味しているのだろうか。

ここで詳述はしないが、シュタイナーは教育を経済的な影響から完全に独立させる形で無償提供することを提唱していた。教育の無償化は、ノルウェーやフィンランドで実現されている。それらの国々では、大学まで無償であるから、その徹底ぶりは目を見張るものがある。一方、教育が有償である日本の教育は、そもそも最初から経済合理性に絡めとられているのではないかと思ってしまう。しかもここでいう経済合理性というのは、人々の可能性を引き出し、社会的幸福を実現するようなものではなく、むしろそれとは逆向きに働くような歪んだ合理性のことを指している。教育に経済的な事柄が入り込む余地があり、それが悪事をなすというのではなく、最初から経済的なものが混入しているのだ。それは思想的にも制度的にもである。

日本よりも悲惨なのはアメリカであり、アメリカにおけるシュタイナー学校の学費は桁外れに高く、一部の裕福な人しか通うことができない。アメリカにおいてはシュタイナー教育までもが消費物質的な対象に成り果てていて——それはもうブランド品の購入と変わらないのではないか——、仮にそこで素晴らしい教育がなされていようとも、その根幹は経済合理性で毒されているように思える。そしてそれは、アメリカのシュタイナー教育だけではなく、アメリカの教育の土台全体を蝕んでいる。そのようなことを考えていた。フローニンゲン:2020/8/31(月)11:37

#### 6179. 消費煽動型のマーケティングと空虚な自己について

時刻は午後7時半を迎えようとしている。今、フローニンゲン上空には穏やかな夕日が浮かんでいる。涼しげなそよ風が吹いていて、今日の穏やかさを物語っている。

---

今日の夕方に街の中心部に出かけた時、ジョギングをするという都合上半袖半ズボンで外に出かけたのだが、随分と肌寒かった。次回以降はもう少し暖かい格好をして出かけた方がいいように思った。仮にスポーツのできるような半袖の格好であったとしても、インナーを1枚着た方がいいように思った。

今日は早朝の計画通りに、“Prosperity without Growth: Foundations for the Economy of Tomorrow”と”Toward a Threefold Society: Basic Issues of the Social Question”の2冊の初読を終えた。前者の書籍の著者が、脱成長型経済において政府や規制当局が果たす役割として、私たちの欲望を刺激するマーケティングを規制することを1つとして挙げていた。これはとても重要に思える。

物理的な空間も、ヴァーチャルの空間も、私たちの脳や無意識に強く影響するような消費煽動型のマーケティングが溢れているのは明らかである。そうした消費煽動型のマーケティングは、先日言及した音響兵器としての悪音の蔓延と同じぐらいに害悪であるように思えてならない。そのような観点で今日も街の中心部に出かけてみたのだが、やはり諸々のマーケティングに溢れていることに気づく。世の中はもうマーケティング空間と括った方がいいようなぐらいに、消費を煽るようなシンボルで溢れている。

心理学者のフィリップ・クッシュマンが提唱した「空虚な自己」について考える。空虚な自己は、絶え間ない欲求に浸されていて、食べ物や消費財を絶えず追い求める。そうした行動によって、空虚な自分の空虚さを埋めようとするが、その空虚さに終わりはない。自己に内在する煩惱や欲求と、外的なマーケティングが組み合わせることによって、空虚な自己はどこまでも空虚になっていく。

明日の午後にでも、この秋の一時帰国のフライトの変更が可能かどうか電話をしてみようと思う。可能であれば、同じ日付か、あるいはそれよりも出発は前でもいいので、コードシェア便間でのフライトの変更が可能かを問い合わせしてみる。

ここからはまた音楽理論や作曲理論の基礎を学んでいこうということも思った。基礎の土台をより堅牢なものにしていきながら、その土台の上に自分なりのものをどんどんと積み上げていく。それは思想的かつ技術的なものである。土台を堅牢なものにしていくことの大切さを強調する必要はないか

---

もしれないが、自分にとってはそれを肝に銘じておきたい。基礎的な知識や技術をいかに自由自在に使いこなせるようになるか。まずはそれを最優先にしていこう。フローニンゲン:2020/8/31(月)  
19:37

### 6180. 9月を迎えて

時刻は午前6時を過ぎた。今、空が明るくなり始めている。

今日の最高気温は19度、最低気温は昨日と同じように10度を下回り、今日は7度とのことだ。今日の深夜は随分と冷え込むことが予想される。本日からいよいよ9月を迎えた。フローニンゲンの気候はもう完全に秋のそれであり、昨日街の中心部に買い物に出かけた際には、ほとんどの人がジャケットか何か上に羽織るものを着ていた。

秋に移行してからの身体的適応も無事に終わったことが今朝方実感できた。実際には昨夜の段階でそれを少し感じていた。鼻水も止まり、喉の痛みもなくなったのである。日々の食実践が功を奏してか、今回の適応症状はとても軽いものだった。次回の適応症状が現れるのは随分と先であり、来年の6月辺りに暖かくなってきた頃かと思う。また次回の適応症状がどのようなものかを観察してみよう。その症状を和らげる意味でも、引き続き食実践には気をつけていく。

昨日改めてフライトを調べてみたところ、行きのフライトに関してはフィンエアーであれば確実に運行していることがわかった。コロナの影響を受けて、10月の中旬にヘルシンキから大阪に行く人はもうほとんどいないようであり、普段であれば埋まっているであろうビジネスクラスの席はまだ十分にあるようだった。通常であれば、数ヶ月前からもう予約が一杯になっていて、半年ぐらい前でも残席の数が表示されるぐらいだ。ところが今のこの状況下においては、1ヶ月ぐらい前であってもまだ残席表示さえされていないような予約状況だ。

オンライン上でも予約変更できるとのことだったので変更をしようとしてみたが、エラー表示が表示されてしまった。それは以前にも起こったことであり、結局コールセンターに電話をして対処してもらったように思う。今日の午後にでも電話をし、行きのフライトはロンドン経由ではなくて、ヘルシンキ経由で日本に帰ることができればと思う。

---

今日もまた創作活動と読書に思う存分に時間を充てていこう。本日の読書はまず最初に、“The Foundations of Aesthetics”を読む。これはフローニンゲンの街の中心部の古書店ISISで2年前に購入したものだ。こちらの美学書を読んだ後に、昨日届いたアマルティア・センの“Commodities and Capabilities”を読もうと思う。こちらの書籍は薄いものなので、もしかしたら今日はさらにもう1冊何か読めるかもしれない。その時には、これまた昨日届いた“Modern Monetary Theory and its Critics”という現代貨幣論に関する書籍を読んでいく。分量からすると、こちらの書籍は明日に掛かる形で読んでいくことになるだろう。

今日の創作活動と読書も集中して取り組み、そこに充実感を絶えず感じていこう。フローニンゲン：  
2020/9/1(火)06:36